

天正記

四



天正記才目録

一 小國ゆゑの事

一 小玉ゆゑの事

一 長宗軍書のこと

一 小國ゆゑの事

一 ひさゆゑの事

一 長宗我部秀吉の事

一 法國ゆゑの事



一、あつりうすお別を別せんうれ人教をさ、
ふつもられすのりこふまされらんうれ人教を
ほしと源七郎秀次語りしうれしとせんとうら
わらちのりしをうらちやくらんを倭おみまうら
まゆこそうしハ赤松家かうんとうらうらこうまれ
まゆこそうしすう秀勝門懸又す足田官兵衛懸とわ
くへへさぬまのハ勝り上取歌の城ふ六の取と
いゆひひひ連なり松り一隊とくろ西國まらとら
なるれうとてうらこ小まや川たぬりん乃まけさ
うのち川すうらうのうとらこまらハの國の人教
とりしうれし伊よの新由よつとれ一歌これと
ふせくふよめてむこうよあうらこよとくとりと

らうんとと敵とつらまらひまやうらうらよ人
教とつくとをまてまのといこまらとら地とまら
ふまらといはてまひまらうらうらとらうらうら
いもまらまらひまやうらうらとら新由うらまら
入大将秀吉をわらうらうらとらふとひと舟をそら
るならくぬわこうんとらぬばせうらとらく一乃と
なん一但一歌とわらうらうらひま十二秀也うらとら
ひまとわらひまらうらとらんとらふ・大山うらとら
後うらんとらまらうらとらまらとらゆらとらうら
うのせ印ね！いまのとまやうらうら一秀こゆらと
まらとら一まのなちやうとらとらとらとらとらとら
せのまをらうらうらとらとらとらとらとらとらとら

これ七の巻ハまのしづりハくろ大面の目
わさぬを殺し風とすら結ぶやのくも日ま
まじらる大せん六百そく小せん三百そく天下
まよぬぬまやうとさうめうくくのちんとう
ましや海といつらぬらそなうぬふよせい一也
志がくはぬおけらまなうと所押ツミをたそ人
せん初乃しうらん所うてん小つけまよくうま
志佐也すりまてや又黒ひやうりしてなまよれ
しとさうく成もうそすまたこめられ成も志不
風くも足たぐられもんといとあさびく押しや
つるまくこひねくろちりく成海くううまよねの
うこころひまきふまゆくそとひくまろくわつれ

事あり海の中一子の海をそとうらうすこり
さす七八町をくく一遊けつてちりあまきと見え
たのまよるりもりのかうす山ときなりみれ
人こくまきさかのもうらてあつひもまことさ
ましぬえうなふこれ何大ていむうとそ海へ
あまぬのれあらんまんと大しやう赤長同赤次也
天子うらうとさう愈うく成あそんうく志よあ別
とさやまきりまそ付さうの味うそつし一城
とあーらへみくこのはう海くして敵の城本儀
とうてう官兵船とけらうそ魁やとことまきり
機とあーらゆうくまんくんとやめとなりあひ志
ろとつあやうと列のく遊さゆらうそこのすい

坂が守城といふは二三のあつひさよちんとさき
めこの川にちろよちろひふうれあつひ五十町つら
うと入河のりこゆのち海りなりちろれよ兵
さ城といふやち長刀といへるつつか人さ一ま
くろ手不まうてとれつとまといてとやこふ
のひさ城ひらこつわつと城されまひひひれ
きふはく城つと治川にせんちんをこころ
とて我道通のちりして款乃ひつとつかりまます
ちりねくはつと乃きのひうれあつひさこいひ
して本すくもをこころなるなり千石控ひやう湯
人殿を入城のちりよちけたと城あつらへまうい
おまとの山下つとよすち寄ての六めを秀ち

同秀次子石あんのひやう未懸お野村とちん懸中
河有長湯たり山右道ありとこのまあてを羽柴ハ
糸季家あり松次良なりちりすち思田ありて
本一のまの丹波流け、井田辰伊敷のりんのまの
りきの流ひやうと一柳常助ひやふ甚密のりせう
戸田ハ二柳回らうちり城山を中ひひつて敵
のつふもた城をうすつとまを山にいたさ
ひろのりちとちろと保とち水のて城もつて城の
まをこつとよゆちり城の用ハつとちのみお山下
すつちり互ては城城せく一のまといひといひ
ち二三代まといちりやちりくひうちちる水力
てさゆふの城ちらんちり所計まのまといび官

乃由水とリんぬややろさな海とのや秀長ゆと
力にうさるよまのくゆくまツこころや入も田
ちんちの乃まを町にだういはいくもうも、
子似よりま又さういハら志よくのりといたらひ
目をうさりてくれとつるをうくし、海舟立とろ
くすうそのの抄やこひ新しや越ぬらんこそやめ
られ秀長らうさんとしもあしけぬしぜんしう
ふとゆく一廿の六もふまうたぐまんみんさ
アア物なやまのてはホの越らるしこしひらう
しあつらるるし豫云

七月二日

赤松判

のんがさい中一はくされお猫ぬ

のひらんをとけはくうん産ととくめられとリん
物ひしなうつさび越境し一乃まよや大おひて
なりさよまんくらくふらんともうしうとけ
とす一バうやらり十里けらるもようしことりふ
とろをえらうとやていひうの包よん段入とくも
ふさこりよ別流といくしとらひしと相くり
すめけりうてあくしやうよよせか一辰らん
所す人しく日去借り包つぬ志やういしへ一と
しとろやうまへまを押けめ越途こくくややう
火と又しうやへ不変し長そつ包新た海門
懸のひよせ、まれこちあまりくらんらん其西の
浦坂らうとぬくよとつしを先ひすくいとるを

るしりわしりむきうのさうひめをりしりあ父子
おらるあのみりしりふん軍軍つとてしりあしり
こひねしりふらりまれのころりまらうしり海川
めとびすおとつしりおとらんとしりひ国一
おふしりし七月十五日参次と大将とてしり
あしり千石あんひやう未羽繁左衛門殿と若川友
又赤いね野さやうたひのさの孫兵衛のせうおれ
おとえんたりし右衛門一柳常助産田三郎四郎おし
きの志次とてしりしり世番日わしりろいさ
及よ次の日志とてしりしりおとらおとらしり海川や
くせいのうのせめおたしり又三日乃るおのよと
トヨウ本とてしりしりみまてしりしりふきんとしり

りしりろひくやくとてしりしり色をてやう
よきしりすとてしりしり事無念の糸繫はらん
とてしりしりしりしりしりしりしりしりしり
こいてたいてしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
おまりを多くしりしりしりしりしりしりしり
したのしりしりしりしりしりしりしりしりしり
天下ははらやうしりしりしりしりしりしりしり
つやめしりしりしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
もたしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

有り終子越中一乃志のこりくひつわつと信長將
軍の小倉んくん中人よあしほうついでせりあ
けしあふ小をつくとまよ辛一のまことれとさい
國へのさくく人へ一預うひはむつのお天下へ
たつあやまつてよまよ乃おんさやくをりし
後國を平ひうくをちりまやひくやもいさうあま
のためよあゆく文やふひあくと頭あつりつうか
こととんせんのためお八月四日さだせいをた
六日よ預しと預びおられむくろくもつんあ
こと秋より書へ川と預事れりしおのゆをよ
らまきうし一預ひり上らくあり勅命法うり
うひおんたふうくまよと日おうり紙つとされ

のん書ふ云 五老討ゆつとまきさうしひ産ま
いてあくとおさるておとてまことまらと用と
くうん人もとせひあてまよと外預いて御軍を
おいさよ軍しうのちやくとちやうみれ外よとつ
たひすこと異おな候のし本おまよ是はならぬ
糸四をけしめさひひあつとすおはちんよつと
預うのあつととくりおと海をりあくよおて尾
おけくおらる事なり 天下しいうひの發句
預なりとのくよあれと志つとん
いれおひとつとまら秋はのちしん
おとつとちりちて敵を三の月
むあちやうすう老りりそれちとあつ明し乃山

こえーてはあそりのりの旗乃れ物とくく免や
屋うれあふのうろりなりぬ目ちを照うりい
こすい乃れとー舟旗ひくししく田れうと
こまひうの山風しやとあきあきつた乃れやを
おみやう文えてふけくは珠よあいにふうこの
わらていねいとつー三免いよのいのり
旗乃れの七とす乃れかん志よ旗志のまろり
のーしくれやこのあさらけあうのふと思ひや
ほろりれこりも人のうみありちやうらら
まててこの守とりとく免ちろふとけくし
まてまれのつうもよあく二やころ新けう
つたまやうぬれ山まてなとわあまこしと

府中ーはけく本村集人依新乃れ旗う田人上下と
りしうと卑く又田本ーとらあさうすのちと
海り玉のバわー旗乃れこれとう五帝左衆の
旗旗水の志やうらちやく孫をらんみを調へ
老とらそまわれも次世うり本船指をたせ
とりぬさま上聖家法ふちひ乃うとまき
國者そねすまひ大ーやうちりややとら
しふし乃大祿つふすゆふとけとゆふと
松ーとまりのたりのしぬとひとまよえ夫
のみなと川の文海旗こえまうさうよ
りこハりつてのあも人のけらとこ
のふやうーがらちとつ包里かくりかま

お田又左衛門同様に居た交してのひびり魚とり
たのまうのめひことろましくまんやうとけくを
越す一越中の國さういよてそうのまへと
ふくろりりりしぬひふ大本とまりたさくを
かーらりりりたうひさゆふとほーめとるまを竹
乃ほー小けし松振はかお城三十六さり孫あふ
ふねもりやま留し田さひたホ十鎗の取國中
東西のびくめみ十八の取しーらへあま城よせく
らん下あの前ーをさあーつこま家小取つしまつ
國に樂肉取ちしびりる山川取けうらんさてくつ
まやうのなるこ三百鎗そろへ坊田れみめい
らりりりぬあしとがま山ととれさとるをたぬ

うまひびくまなんちよまを本枝をされさうお
人さのうまふまーのふまらうけまらえと
よーのかりうもとほさひこまのたつととる
らんまふ酒はがれ馬れのみみとあま山りり
れくも酒ふいつこのまゆまかまて越中一國
をみお自乃あさるありよもをうるをたてく
ふりぬり新みらを行らうれ日さ死せいとい
まのうへまよく此國のけうまも全役のま
酒が守やうの今又のまもんやあのみ許とーや
をあーらん天下まもるあちあのさうひたてやま
ほるま山うらうらうのまて人数を過し
何一た月くともつひのちやくらんれ人数をまとの

うふふ小磯田乃大細言これとのまやう上野牧前
田又厄来つゝの懸やううまきとうふ赤左来つゝを懸
本一お金森又赤八らちを出陣のうとうや色せん
らやう坊つけた云さ色りんいあも彦六とり千歳
ひさのうときさびう集人のすけ中一村式部お堀尾
殿一の山内伊太濃門契友他内九ふ右る野ホるり
あのかりまきん代流おそなるうーろそ瓜へて川
もうのまゆ陣うーせい兵りりそ人と尋ら思ふこ
せいとせつりそ文を津波多を陣う色うてハるこ
のこねるうそゆしんとり一城四日おまうと枝みね
るうのかり川こもりうて在陣し一七日のる長
もゆふしやちくしそをうひわんふらまうと城さへ

きりくらききら城さううく風流とけうひりの傳
ころらとまねよあけやもし火まえまらうをう
もたてくゆねれ事あたしす流率けらんやまを
葉本のうけうーあを葉とつうしふあひをとら
城おがひ城もううとさとうーあれ城ししのくこ
つをを城のめふあよとここう水もり志なく
こそうつらうとうれかすうふねのみふううして
陣中一のひたをぬううこれ、事うの連将見え
の城とまこれのこくー其らうー見しやうあんを
あううすはらくむられちりおひて 天下
やあそあううよものうーこまふ疾びりんの事
人のこらまううす日とまこもひとかなすこら

なりあやまは時をあらけりしりくりに事
なりれでいぢんまう世余とろんしし本船川
志やうの河部はふ川あはれさうすいよとのまは
九回代換年 天下ゆふくよ定免へ物あり
織田信雅乃まやうあきりなめくしとと
を律さよ也けんってんトとつてしとあ志くや
の巻をまうられゆをよいて命とたまく三つやく
よ云うんすう老成を是くは川ししゆなるもの
よしとくくやまの終時を承く乃城とさうけらる
国八月一日いぢんや小孫の包し清くん産す
てんらんあつて三日よまお田清らやとあうに四
又日のあひさふ國中一志川り小おとて張さるあ

越はより役れまあきとらと又役者を清くりに
まうひさの國とてあ孫うこうら左京大進とら川
れ又子天下りけくまや一きのもたうまとまを
これよふつて金さり五君ハとけらる一取い
版さまう張まひ張とらまうつらんよそなるあ國
一巻んりしと六世よくまんまよまり牛日坂お
つとまはる張のまらゆ國日と知め張まのよ
まうふしと回國を上まよと三つあくの法城あひ
俊ししりこらう志んたの大将秀吉同秀次くお
くふ巻するえやり小うんまやくまのゆれ中あ
ふふのくめ張なししりらまう子石在國を各う
らん中今秀秀吉とあくハ大軍張引といほう張

乃こめすありしも打ち交りてみふりしまのすり乃
宋ひれいりさ乃大将也 天下はまうん志し
ちうとよくむりもよめてお別ふしうあふれ
もれわしとひまの長僧我を去依一國ゆよき
め赤次はく井田赤しひ志やをりる宋ひ一あ
やあふすも物りりひくならのそや下とのこう
る志やうくはまとありらん道國ゆゆのく
ななり、眼業藤七良ひてはくゆ別乃とのま
なりひく武部のお備播尾もすけ一柳常助山内伊
播門らん下ありしくは長よりとりんはひく
家乃年らんりしてあまよくすゆ別府中
懐山らん兵機を定め結以て名地よりいよれふ

そ、利家所たひしあまうりやえとくし小
早川友田赤大坂小ありゆるりありし
小六らんはりすあま志ゆこせしひさぬまの
志ゆこ千石檀兵藤藤十川やと田きんらんらう
まうやう地ふ志よでしめせんあく小つひくみ
すりあまりありしをまれさる基内りく六
先頭しゆこすいほこまを本がまこひやう米これ
と志ゆこまにしぬの志ゆこしお野お赤門又あり
松尾三良お赤藤志播門ありしと田赤那赤志是
と志ゆこすらん志う色軍せんしゆ小くさるれぬ
こりあらの福徳左志りん大丈のしとく志赤あり
三三赤の志ろまを中しは赤志乃せううし

わのりこころをさる山右遊よりはくしとるせり
こりのさきんの旅下流ふつ、さしこまどうみ赤
危色りん色よくみそそゆる色今我あまきうと赤
登初のみさいん越前島大國まり大車一の所へ目
ちやくしいくしておたりらうここのの比とん
まのちられ清けらふおつうるさしゆいあん
まゆりさのくわいこくをのれく越前上國ちよ
さし物さきおり羽葉左邊門のせうにすた石を
若川すま万らくまじり集人ぬま万あくとらるふ
まんとくなりま入田入さ色さん佐く難入ふさ
合我すまの軍中一城ぬさんすの糸結登一
國か契さん國の我りくことくんこうやして

越中一人田孫四赤よりあまきとけのりす其日新
作よは頭まいて一こうこるくむつれ守りぬよ
せしめゆふひこののくお張ささとう六さ色りん
まはりのすの上十七のあくのあゆとわこしし珠
ふ天さいよあうさる老つりてのあまきとせんと玄
ひらりぬめうのりかろれけいん救りまらん珠とと
くろくふよじ一しいよらやうくふせう満年一
も又田比とくま日まむ民百姓のこく一珠とと
かんりんおまよとさるこれぬらんアんとれをふ
ふ七色乃う一を一ぬれくみとなり赤 仁五
十三代さいび天皇六年一けいこの國さうりへをま
けそぬ人臣田す又代さいじ物 まやうふやう

三十よきのらふとゆて因比れ申もんとゆて先
其よりりんめりやりのを多しこれとありけし
そのなり今やてん下こもんあふさるる
とゆれのしとてん下はたのたあふさるる
されゆを國よさの先乃さうらんりくた見よ
と川乃う志より一法國のちしやのらまやう
をいく佛禪のゆい志よとたつねりらゆて
とてこれとりひす想き張をこま張すを張り
又山と下さうまんうれかまいらうい山と志ゆ
志がらんまうとて張ゆとのなりならんけ
周裏のもしと志よし張ゆこれうくと他り
よりとてあふちとりらうしとてか天下勅やう

りんうくれは姿を定むるのるをん國とん
ゆてまてまんうくのたうなりもてまて
ち乃やうこれめりまをまんみうとてこれ
りてこなよアし公張我張百しやうのが人志
やくととくびはよつてまておまてとやう事
たりもよはそまらこよとのま張ゆくつり
そのまてはりいよく魚のまんれ何つれ
のまてひせんじ業の長久もとありてそのま
色川の口ひれよあふけくとつ魚をまてとけ
すんつてすの大海のつてまてとてまての
大正十三年十月五日

天正記第四終

HOX
323
9